

## 様式③

提出日 2020 年 1 月 16 日

# 2019 年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「宮古方言の消滅危機と復興について」

氏名：比嘉祐太 山城琴音

所属学部学科：こども文化学科

## I. 初めに

沖縄の深刻な問題点について考えた時、現在の若者のあいだで深刻な方言離れが起こっていることが挙げられると私たちは考えた。実際に、私たち大学生の間でも祖父母や両親のように流暢な方言は日常で話すことは全くない。単語を知っていても上手く使う使い方が分からなかったり、文法に関しては全く分からなかったりという人の方が多数派だった。そこで、若者の方言離れに関して研究したいと考えた。

## II. 研究の目的、動機

2013 年に行われた沖縄県の方言認識調査では、全体の 8 割の人が「方言に親しみを感じる」と答えた一方で、「日常的に方言を話している」と答えたのは全体の 3 割も満たなかった。また、若者の方言離れは大きな都市よりも離島などの小さな地域で広がっていると調べていく中で知った。そこで、沖縄の離島である宮古島で方言の消滅危機の実態の調査を行いたいと考えた。実際に方言を話せるお年寄りの方や、方言を話せない小学生に、消えゆく方言に対しどのような思いがあるのか、そして大人や先生達はどのような形で子供たちに方言を受け継いでゆきたいのかを調査内容とした。さらに、方言の消滅という危機的状況に置かれた宮古島の人々はどのような対策を行えば、方言がこの先も代々受け継がれることが出来るようになるかをインタビューしたいと考えた。

## III. 研究方法、地域、期間

研究方法としては、市民の方々に方言についてどういう認識があるのか、そして消滅危機とされていることについてどう考え、どのようにすれば方言を若者の間で定着させることが出来るかをインタビューする。また、今まで生活してきた中で方言に関するエピソードも聞く。また、子供たちの意見も取り入れるため、小学校を訪問し、方言に関するアンケート

トを実施する。アンケート内容としては普段方言をどれくらいの頻度で使っているかや、方言をさらに広めるべきであるか等を含めた 5 項目からなる。地域は主に宮古島の都心部である平良地区で行う。都心以外の方言の実態もしるため、城辺地区・久松地区でも 1 箇所ずつインタビューを行う。期間は 2019 年 9 月 11 日(水曜日)～9 月 13 日(金曜日)の 3 日間を対象とする。

#### IV. 結果

まず初めに、平良地区では 48 歳の方にインタビューを行った。方言が話されなくなってきていることに関しては、とても不思議だと話していた。小さな頃からおじやおばあとお話する中で方言を自然と学び、話すようになったという。しかし、城辺地区から平良地区に転校した際、方言を話すと周りがかかわれたりしたことから、一時期は話すのをやめたと話した。今の子供たちに関しては先生方がまず方言を自ら学び、子供たちに教育すべきであると語った。次に城辺地区の 70 歳の方にインタビューを行った。彼が小学生の頃は方言を話すと方言札という木の板で作られた札を首からぶらさげなければならないという決まりがあった。これは、戦後の日本が行った【標準語励行運動】が影響しているものである。先生方もみなこれに従い、方言を話した児童を罰していたと話す。復興に向けて必要な事は子供たちが学びたいと思うことから始まるという。強制的に覚えさせているは身につかないと語った。久松地区の 60 歳の方は今現在、方言復興に向けて仲間と集いを行っているという。この集いは誰でも参加できるものである。その集まりの中では必ず方言しか話してはいけないというルールがあり、そこに若者が積極的に参加することで、今よりも方言の認識を高め、定着させることが出来るのではないかとかんがえている。最後に、小学生を対象としたアンケートでは、「方言を日常生活でどのくらい話しますか？」という質問に対してほとんどの子供たちは話さないと答えた。理由として最も多く挙げられるのは、分からないからである。次に話せなくてもいいという回答が継いだ。しかし、「方言は伝えていかなければならないと思うか？」という質問に対しては大多数がそうであると回答した。

#### V. 考察、分析

調査を終え、若者の方言離れの原因として挙げられるのはふたつあると考えた。1 つ目は進行する核家族化である。祖父母と離れて暮らすため、方言が身近になく両親も話さないため日常的に方言は必要でないといわれる傾向にある。この先も、核家族化は進行すると考えられている。そうすると、方言を話す若者は年々増加していくと考える。2 つ目に挙げられるのは県外への進学率・就職率が高くなっていることである。昔と異なり、生まれ育った地域でなく他の県で学ぶことが容易になったため、10 代、20 代の若者は方言を耳にする機会が圧倒的に減り、話すことが出来ないと考えた。

## VI. 今後の展望

調査結果から、学生である私たちが方言という伝統に興味関心を持ち、自らが学ぶ姿勢を持ちたい。さらに、方言を定着させることに重要なのは環境であるため、初等教育から地域の方言を教育していける環境づくりを提唱したい。

## VII. 終わりに

今回、琉球弧研究を通して宮古島の方言消滅危機の実態を知ることができた。さらにその問題に対す解決方法を結果から考え、話し合うことが出来た。

## VIII. 参考文献、調査協力

Wikipedia

stat.go.jp

next.rikunabi.com

宮古島市立東小学校

平良地区・久松地区・城辺地区の市民の方々

## IX. 指導教員コメント

消滅の危機にある方言を通して、沖縄の文化の継承について理解を深めたのは良かったと思う。更なる研究の進展を望みます。